

保育の「ビデオ観察」雑感

佐伯 育

最近、ビデオによる保育園や幼稚園の児童の行動観察がさかんになってきた。このこと自体は大いに結構なことなのだが、どんな方法にもそれなりの制約と限界があるので、注意を要する。

まず第一に、観察の「切り取り」効果であ

る。保育者にしろ、園児にしろ、常に過去から現在、未来への「流れ」の中に生きている。なにげない動作が、数時間前、あるいは数日前、あるいは数年前の「のこと」との関連で意味づけられていたり、あるいは、「あとであれをしよう」という心つもりのもとでの、ほんの暫

定的な措置であつたりする。それがビデオで一つのシーンとして「切り取られ」た場合に、その映し出されたことがらだけから判断がくだされると、実はまるで見当違いだということもある。

第二は、いわゆる「観察」効果である。つまり、その場で、特定の「観察者」がビデオカメラをたずさえて、そこでカメラを子どもに、保育者に、あるいはその周辺に向けて、「カメラを向けている」という事実にもとづく影響である。「観察されている」というだけで、人の行動はありのままではなくなる。「ビデオに撮られ、記録される」との影響も、場合によっては決して無視できないほど大きい。したがって、ビデオ記録の場合には、ビデオ記録を撮る人は、撮られる人とはまったく無縁の、「あかの他人」であることがのぞましい。

また、撮られているシーンというのは、その観察者のそのときにおける興味、関心、あるいは「なにかがありそうだ」という直感の産物であつて、観察者の価値観や思想と無縁ではない。したがって、撮影する人の価値観や思想というのはつねに考慮しておき、映像を解釈する際に念頭に置いておくことが必要である。

第三は、「サンプリング効果」である。つまり、特殊な、まったく偶然のできごとが、あたかも典型的な出来事のように扱われたり、逆に、きわめて頻繁に起こっている出来事がたまたま、あつきりと、偶然的なことのように扱われてしまう、ということである。

こういう問題はいろいろあるが、やはり映像というのはとてつもない情報量をもつていてることも事実である。わずかな目の動き、からだの動きから、本人の無意識のうちに働いている

「何か」が鮮明に映し出されている場合もある。また、ふだんの保育活動のなかではとても目が行き届かないさまざまのことがらの相互関係が、ビデオで見てはじめて歴然と見えてくることもある。そして何よりも、保育者が、「自分を見る」ことの重要性を強調しておきたい。

保育活動の現場では、ついつい「あの子」を見たり、「のこと」に気を配ったりしているが、そういう「自分」が、子どもにとってどう見えているのかを、「子どもになつたつもりで」見ると「」とは、是非とも実践していたい。だきたい。

さて、ビデオ記録を撮影する際に、是非とも注意していただきたいことがある。それは、撮影者は、できるかぎり「フィールドノート」をきわんとつける、ということである。とくに、子どもがあのとき何を言つていたのか、どの子

どもがどの子どもに何をやつていたのか、などなどは、あとでビデオを見ただけではわからぬことが結構多い。そのために何でもそのとき気づいたことはどんどんノートに記載しておくことである（ノートはその場で書く場合もあるが、その日のうちにビデオ再生しながら想起しつつ書きとめてもよい）。

また、ビデオ記録にあたっては、つねに「關係」を記録するよう努めてほしい。特定の子どもに焦点を当てて「その子どもが何をするか」を詳細に記録するというよりも、「その子どもの行動に關係している他者、他の出来事」を記録する、という心つもりで記録してほしい。とくに、他の園児とかかわり、あるいは特定の「集団」とのかかわり、などなどである。

したがつて、近距離で「表情がわかる」ようにクローズアップで撮るばかりではなく、遠くか

ら、周囲の状況を視野に入れて撮ることもさわめて重要である。

もう一つは、極力「一部始終」を記録する。ということである。やたらにあれこれのシーンを断片的に記録するのではなく、コレと思ったところでは、カメラを動かさずに、じっくり撮り続けるということである（幼稚園などでの「けんか」とか、壊したとか）ぐらいで動搖してはならない。あくまで無干涉で、子どもたち自身でどう対処するかの一部始終をしっかり撮り続けるのは、かなりの「自制」の努力が必要だろう。しかし、そういう場合の記録こそが貴重な記録になり、冷静で落ちついた目で保育を見ることを

間を意味していることがあるので注意）。

なにしろコトが起こってからでは遅い。何かが起こりそうだという直感が働いたら、むだになつてもよいから、どっしりとカメラを据えて、あとは何事が起こっても（文字どおりの

「危険」な事態が発生しないかぎりは）ただ平然とテープを回し続けることである。よくある「けんか」や小さな「事故」（モノを落としたとか、壊したとか）ぐらいで動搖してはならない。あくまで無干涉で、子どもたち自身でどう対処するかの一部始終をしっかり撮り続けるのは、かなりの「自制」の努力が必要だろう。しかし、そういう場合の記録こそが貴重な記録になり、冷静で落ちついた目で保育を見ることを支援してくれるのである。

（東京大学教育学部）